

あの頃、あの人、あの教祖 ―昭和40年代、それぞれの信心の故郷をたずねて―

白石淳平(教学研究所)

はじめに

・ 紀要『金光教学』第64号の刊行を経ての思い。

- ☞ 本年は前教主が御帰幽に、また教祖生誕210年であり、教学研究所設立70年、そして来年は戦後80年。
- ☞ そんな本年の紀要は…昭和40年代の信心模様を扱った白石論文、『金光教典』(昭和58年)刊行の様相を中心に、「教典」をめぐる浮かぶ信心への問いを論じた橋本論文、そして、新たな金光大神直筆帳面(「金乃神様金子御さしむけ覚帳」)による研究展開の可能性を探った堀江資料論考を掲載。
- ☞ 現代世界の目まぐるしい変容の中、教祖の信心をめぐる資料環境や解釈基盤も大きく変化する「今」。
- ☞ 一方、昭和50年代生まれの私も含め、昭和戦後期の経験を直接に知らない世代が多くなってきた「今」。
- ☞ そんな「今」は、これまでの信心、またその歴史への見方を、改めてチェックしてみるチャンスでは。

・ 本日のおはなし。

- ☞ その「今」を生きる「私」として、論文のあらましを紹介しつつ、研究の手前の問題関心や、こぼれ話を。

研究関心の根っ子のところから

① 歴史へ／からの問いかけと、その“痛み”

敗戦のとき、僕は十九歳でした。[…中略…]飛行機乗りに必要な数学や理科は勉強したけれど、国語なんか必要ない、西洋史、東洋史なんか、そんなもの覚えたってしょうがないと全部切り捨ててしまった。／なんて短絡的で、浅はかだったのか。暗愚の至りです。／放棄したものが人間には、人生には、必要だったのだと、後になってわかりました。／歴史の流れ、社会の動き、政治経済の問題、そういうものを知ろうともしないで、全部失ってしまった、こんなはずじゃなかったと言っても、もう遅い。あとの祭りです。／誤った判断のまま、一生懸命やりさえすればいいだろうと思っていた僕は、日本が戦争で負けた途端、足をすくわれ、ひっくり返ってしまった。

(かこさとし『未来のだるまちゃんへ』文春文庫、2016年、17～18頁、「／」は改行、以下同)

☞ かこさとし(加古里子:1926～2018／本名中島哲[なかじまさとし])

☆軍人(飛行機乗り)をめざし東大工学部・大学院に学ぶも、戦争体験を通じて、人間や社会のあるべき姿、またその未来を問い、伝える児童文学の道へ。

☆卒業後は民間研究所勤務の傍らセツルメント活動など社会福祉事業に従事しつつ、絵本作家として創作活動も続け、600点以上の作品を残し受賞多数。2018年没(92歳)。

② 「教祖」を感じる本は何ですか？

- ☞ 故金光和道先生(研究所部長、図書館長を歴任)の問いかけ。
- ☞ 直截な「教祖」への言及のみが、その人、その時代の「教祖」への関心を表わしているわけではないということ。
- ☞ その意味で、逆説的に、「型」(範型)としての「教祖」との関わりの表現は、距離感(抵抗感)という自己理解の提示にも。

あの頃、昭和40年代

・私にとっての、あの頃。

- ☞ 現行の『金光教典』刊行(昭和58/1983年)から遡ること3年、昭和55年に生まれた私。
- ☞ 幼少期、教会の信者さんの多くはまだ働き盛り。平日の夜に月例祭が仕えられていたことも。
- ☞ 年齢も職業も、そのキャラクターも様々な、いわゆる「名物」の信者さんたちの思い出。
- ☞ 一方で、宗教自体にやや難色を示すような世の中の雰囲気も。
- ☞ そんな私自身の金光教イメージの“基礎”が形成されはじめた時期としての昭和40年代。
- ☞ そうした時代における、一つ一つは小さいけれど、個性豊かな信心の営みと、その「集い」の感じ。
- ☞ その“感じ”は、「今」、そしてここからの本教信心を展望するにあたっての、大事なヒントになるのでは？

・これまでの把握では

- ☞ 先行成果*1では、主に今日に直接繋がる教務・教政上の歴史過程として顧みられてきた昭和40年代。
- ☞ 急速な経済発展の一方で様々な社会問題が生じていた同時期*2。
- ☞ 対社会的な問題への手立てを講じるべく教団が構想され、「二課題*3」設定といった教務施策も。
- ☞ 新教典の刊行など、後に諸々の教務施策の実現にも繋がっていく“戦後教団史の画期”という把握。
- ☞ その背景には、本格化した靖国神社国家護持の法案化をめぐる議論など、昭和40年代当時の政治・経済状況や国際情勢への懸念が。
- ☞ また、金光攝胤の帰幽と金光鑑太郎の教主就任(昭和38年)、高橋正雄の帰幽(昭和40年)といった、いわゆる「教団代替わり」の危機意識も。

・信奉者個々における信心営為への関心

- ☞ 個々の実存的な問題と重ね合わせた「教祖」探究の代表的な検討対象となってきた高橋正雄の“没後”。
- ☞ 当該期における対社会的な教務・教政上の施策や、そこでの統一的・単一的な信仰表明とは別様の、信奉者それぞれの個的な経験として浮かぶ「教祖」への求めとどのように関わりながら本教の自己理解が醸成され、「教団」を構想させることとなっていたのか？
- ☞ 各々の生業で時代社会の影響を受けつつ生きた信徒らにおける、生活と信心との切り結びのありようには、制度的実体に留まらない、より幅広い視野に立った「教団」、そして「教祖」への問いの可能性が。
- ☞ 当時あって種々の立場・役割をもった人びとにおける個的な経験として浮かぶ信心営為の実際とは。
- ☞ それぞれの人間の経験のありようが、「教団」の歴史として「今」に投げかける意味とは。
- ☞ 信徒会報『あいよかけよ』も手がかりにしつつ、信徒会や教務、そして教信徒個々における「教祖」への求めのありようをうかがってみたい。

*1 児山真生「昭和四〇年代における「布教」の課題—「教会の自立性」と「教団布教」をめぐる力学—」(紀要『金光教学』第55号、2015年)、大林浩治「1960年代、教団を思い描くあり方—信仰展開の可能性のありかへ—」(『同』第48号、2008年)、宮本和寿「戦後教団における社会性の意味—竹部内局によって設定された「二課題」に注目して—」(『同』第42号、2002年)等。

*2 第2期の高度成長期を迎えていた昭和40年代の日本社会は、人口が一億人を突破し、世界第2位の国民総生産のもとで、いわゆる「一億総中流」が謳われるほどの経済発展をみていたが、急激な工業化は同時に、公害をはじめとした深刻な社会問題を引き起こしてもいた。さらには、アメリカによるベトナム戦争への軍事介入や中国の文化大革命といった不安定な国際情勢の影響もあり、全共闘会議による学生運動も激化の一途を辿っていた。

*3 昭和43年8月9日「御取次成就信心生活運動教会長協議会」にて設定された「本教の信心と御取次成就信心生活運動」「こんにちの社会と本教(教会)」の二課題のこと。

『あいよかけよ』と河上譲一

・歴史資料としての『あいよかけよ』誌。

- ☞昭和43年に46号で終刊となった「信徒会報」の号数を引き継ぎつつ、その編集方針及び体制を改め、新装改訂された信徒会報『あいよかけよ』(2024年10月で589号)。
- ☞教報やその他の教内紙誌類には表われてこない信奉者個々の営みを、その都度の教務・教政の動向や時代社会の状況とともに顧みることができる同誌の記事。
- ☞教務・教政とは異なる立場で本教信心を求め表わした数多くの信奉者の情報には目を見張るものが*4。



・河上譲一における信心実践の歩み

- ☞改訂当時の編集局長は、信徒会結成の発起人の一人であり、信徒会連合本部委員長の河上譲一。
- ☞備後緋(かすり)の生産地であった広島県新市町(現福山市新市町)にて出生した河上氏。
- ☞織物卸商を営むも大手取引先の破産によって連鎖倒産を余儀なくされる。
- ☞再起へ向け様々な神仏信仰への関心を寄せていたなか、妻の手引きによって新市教会に参拝。
- ☞府中教会より招かれた石井格之助の教話に感激し、信徒総代となるまで信心に打ち込む。
- ☞以降、織物同業組合の検査長、女学校(「至誠塾」)の塾長等を歴任。
- ☞さらに、学校運営に携わる中で、後のブラザー工業の前身である日本ミシンの関わりを得、昭和12年に名古屋本社に招かれて日本ミシンに正式に入社、17年には取締役。
- ☞当時は熱田教会に在籍し、終戦直後の教会復興にも貢献、その後、信徒議員に選任され教団の要職に就くこととなり、信徒会の結成と発展に尽力していくこととなる。

・「二課題」を生きた人

- ☞社会事業に献身する河上の姿は、後に『あいよかけよ』誌上において「二課題」をそのまま生きた人として紹介され、以降こうした信徒らの信心経歴が数多く掲載されていく。
- ☞一方で、河上自身は、どこまでも個々の経験に即した信心理解として表わされる他ないとの確認。
- ☞「二課題」の視点を反映しつつ実践例として切り取る編集意図と、自らの信心の歩みを振り返る当人の実感とのズレ。
- ☞当人には思わず行動してきた結果見出された信心の世界への出会いが、事後的に「二課題」に位置づける話型によって、予め教祖になぞらえた「追体験」の事例に枠付けられる問題。
- ☞個的な経験としての信心営為から、普遍的に通用する信心像・教祖像が抽出、構築されていく一様相。
- ☞模範・規範として生きることが目指される教祖と、生きることで掴み取られていく、実践の「始源」としての「教祖」との、意味的な差異の問題。
- ☞前者の範型的教祖が人間の生を縛る向きであるのに対し、後者は逆にその生の意味を押し広げていく。
- ☞紙面上の様相は、直截的に教祖の教えを掲げつつ布教における社会貢献の重要性を訴えかけるような、教務施策上の価値評価を先立てては見えてこない信心の裾野の広がりや可能性を逆照。
- ☞そしてその可能性は、各時代に生きられたそれぞれの信心の姿に通底するものでは？



*4なお、同時期に信奉者によって編集・発行された他の代表的な教内誌には、昭和32年に金光教北九州教区青年会連合会会報を改題した『玄潮』もある。

それぞれの「戦後」と「教祖」

・安田好三（大正10～昭和63）における「始源」としての「教祖」

- ☞大正10年、千葉県にて出生、一時親類の養子となり東京の小学校に通う。
- ☞大連に渡り南満州工業専門学校を卒業、兵役、諜報部隊候補として陸軍中野学校へ。
- ☞小笠原諸島に出征中に終戦。
- ☞昭和19年神奈川演習で小田原教会にご縁を得て、終戦後に教師輔命、教会後継へ。
- ☞東京出張所次長、同所長(S37.5.9～45.2.13)、教監(S49.5.10～59.5.18)等、要職を歴任。



いったい、お道の信心では、この激しい現代社会の中で、もっと激しい行動指針というか、そういうものを、生み出すことができるのであろうか。そういう疑問が私の中に起こっている。／私自身、私の金光大神は、私をコントロール(制御)するほうでなく、私の信心活動、すなわち話したり、行動したりするアクセラ(始動力)の働きをするからであると考えている。(安田好三「問題提起」私の金光大神を語る)(教会会主催・共同研究会「本教の信仰原理を求めて—私の金光大神を語る(その二)」昭和46年12月9日、『きょうがく』第8集、金光教教会、昭和48年)3頁)

- ☞当時の社会問題に対する教団としての積極的な行動指針への求め。
- ☞教祖の信心をめぐる「実意丁寧」で「おとなしい」社会的評価の乗り越えと、さらなる展開可能性の模索。
- ☞昭和4、50年代の代表的な教務主導者イメージを彷彿とさせる、アグレッシブな信心像。
- ☞それは同時に、信仰的規範、いわば「回帰」の宛先として認識論的に求められる教祖というよりも、安田という一人の人間において、常に実践の「始源」として生きられる「教祖」の可能性を感じさせるもの。

・「教団」への問いと願い

われわれはすぐ教団、教団と使いますが、教団とはいったい何を意味するものなのかということ。教団そのものも、社会との対応の中で、質的に変わってきているが、今日における教団をどう考えるべきか。

(「第4回政治・社会問題研究会」安田好三発言／『政治・社会問題研究会 第4回研究会記録「政治と本教」その総括—本教の信仰原理を求めて—』金光教本部教庁、昭和45年、104頁)

- ☞政治・社会的問題に相対する実体組織たる教団としての社会性の問題が、個々の信仰的実践との連関において問われていた議論の文脈上での発言。
- ☞ここでの「教団とはいったい何を意味するものなのか」との安田の言は、「教団構想」といった制度的実体(「教団そのもの」とは、むしろ別様の問題の位相を予測させる問いかけにも。
- ☞むしろ、可能性としての「教団」へ向けて問いに付されているのは、教団を統一的な信仰や態度の表明を発し得る制度的実体とする認識自体であり、またそこでの信仰的価値の措定。
- ☞東京出張所所長として、教団を代表して公的な場面に臨んできた安田自身の経験に発する問い。
- ☞実社会における個々の営みの統体として志向される「教団」、そしてその「始源」として分有される「教祖」の可能性へ向けて、本教信心が鍛えられていくことへの願い。

・「教団」への願いに滲む「戦後」の“痛み”



[教監を拝命して]ご本部へご出発の前日私に、「自分は中野学校時代教官を経て野戦に赴き、すでに命はなかったのだ。自分の代わりに何人かの戦友が犠牲になっているので、今まで生きてこられたのは深いご神慮と拝し、このたびのお役目に生命を賭ける心算である」とお洩らし下さいました。(矢藤一郎「弔辞」『花神 安田好三大人一年祭偲草』金光教小田原教会、1989年)

- ☞教監在職中折に触れて安田から溢れ出たとされる、生き残りの負い目、そして自身もまた戦争による暴力に関与した罪の意識。
- ☞安田における政治・社会問題への強い問題意識や「教祖」への求めは、自身の戦争体験に発していた。

・「教祖」探究の異才、竹内長次(明治43～平成元)

- ☞ 本教教師であり医師でもあった竹内。
- ☞ 「覚書」が知られることとなった明治43年の生まれ。
- ☞ 医師を志して東京帝大医学部に学ぶも肺を患う。
- ☞ 教義講究所入所(昭和9年)の後、本郷教会にて取次に従う。
- ☞ 戦時下に軍医候補として医療の道に復帰。
- ☞ 戦後は、竹内医院の「あかひげ先生」として地域医療に尽力。
- ☞ 同時に、本教教師として教祖について数多くの言説を残す。
- ☞ 歌人として神宮歌会に招かれるほどの文化人でもあった。
- ☞ 明治末大正期に幼少期を過ごし、戦中戦後の時代社会の激変に向き合い続けた生涯。
- ☞ 平成元年、住居火災により夫人と共に御帰幽(御祈念の姿のままの最期であったとされる)。



・時代社会の変動とそれぞれの「教祖」

金光教は迷信打破の宗教である、千余年の間、日本人の心を金縛りしていた日柄方位の迷信から、自由の世界に日本人を解放して下さることが金光大神の神因であると、直信佐藤範雄先生がしばしば教えられました。私は少年時代、佐藤宿老先生の教説を書物で拝見いたしました。が、迷信打破をもって、教祖出現の理由とすることによって、さほどの感動も共鳴も覚えませんでした。今思えば、当時すでに母が御信心を頂いていて、日柄、方位とか毒立、とかのわずらわしいことを申さず、格別不自由を感じなかったことと、一つは学校教育のおかげで、こんなことは非科学的で理屈に合わぬことを知っていたために、左程宿老先生のお話も耳新しく感じなかったのでありましょう(竹内長次『古今未曾有の道』金光教徒社、1961年、65頁)。

- ☞ 「迷信打破」教義を中核とした教祖像に新奇性を感じ得なかった「少年時代」に言及。
- ☞ いわゆる「世俗化」が進行する時代の相貌として。
- ☞ しかし同著には、昭和28年刊行の教祖伝記『金光大神』を読んだことで、方位や毒立をめぐる金光大神の信心について認識を新たにさせられたとの経験も語られる。

ところが最近、御伝記「金光大神」を読ませて頂き、明治十六年九月八日、佐藤範雄先生が、金光様に、「この道の奥義はなんですか」とおたずねして、こえのひびきに応ずるように、「この方の道は九箇条である」とお答え頂き、これが、佐藤先生が、教祖様より受けた最後の御教となられたという、その九箇条の一と二に、方位、毒立とあるのを拝して愕然としたのであります。そうして改めて、方位、毒立との御教を、別な角度から考えさせて頂き、大切な御教であることの意味を少々わからして頂きました(前掲竹内『古今未曾有の道』65頁)。
- ☞ 大正期の竹内少年にとって「耳新しく感じなかった」日柄方位をめぐる教祖像や信仰言説が、戦後に至り教祖伝の知見を介することによって、「大切な御教」として改めて受容されている。
- ☞ 戦後復興を経て高度成長期に至った時代の思惟と本教信仰の接点・相克を問う言説を多く残した竹内。
- ☞ それら言説は、神的な超越性を世俗の論理で説明可能とする合理化＝「世俗化」の一様相とも。

苛烈なる戦争から終戦後の混乱を通して、生命の危険も、境遇の幾変化も、数限りなきご神寵と金光様の御祈念によって、一つひとつ御陰を蒙り、財もなく学もない私が東京の一角、しかも私に最もふさわしい場所に病院を頂戴して、信仰と医学を一つの生命にかしこんで仕事をさせて頂いておられますことはまことにありがたい極みであります(竹内長次『神徳のなかに生きる』金光出版、1999年、137頁)。
- ☞ しかし、そこには同時に、テキスト環境の変遷を経験しつつも、絶えず竹内に教祖の信心を求め続けさせてきた、戦後社会の迫りに発する信心の問いの実際性が。
- ☞ 信仰言説や歌作をめぐる教示を請うべく教内外から竹内のもとに寄せられた数多の便り。
- ☞ その一方で、竹内による言説の数々は「答え、ではなく、日々人間の生死に向き合う中で求められた、決して絶えることのない渴望としての救済への「問い、」。

- ☞それは、「世俗化」といった歴史評価とは、また別様の主体形成のありよう。
- ☞何が教祖を「教祖」として求めさせ、展開させるのか。
- ☞竹内が学生時代に交流していた、写實的、生活密着的歌風を特徴としたアララギ派。
- ☞竹内の言説に読まれるべきは、教祖の問題ではなく、「教祖」として求めさせ、語らせる「人間」の問題。
- ☞その問いの構え方にこそ、「教団」をどう思い描くのか、どうかたどるのかの根が、深く広く張られている。
- ☞それは、昭和40年代という時代に生きられた、それぞれの「戦後」の不安と痛み、そしてその重みと共に掘り起こされるべく、今へと投げかけられている。

あらためて、「教祖」って!? 「教団」って!?

・信徒会におけるめいめいの助かりへの願い

- 信徒会のどのような働きが、あっても、これは全て教会の御取次を頂いて、各々が信心生活をさせて頂く内容である。／それが、めいめいが助かる中である、そしてどの様な働きも、全て教会の働きで、なければならない。[...]／けれども、人が大勢集まったり、組織活動が活発に進められたりする事だけが発展強化ではない、本当に人の助かる働きが、生き生きと表わされていく、そういう事の中実^[ママ]でなければ、いかに活発な信徒会の活動であろうと雖も、金光教の信徒会の動きではなくなる(『信徒会結成二十周年記念 東日本信奉者集会の記録』、1968年、65頁)。
- ☞信徒会組織化に尽力した毛利賢蔵(築地教会在籍／信徒会連合本部常任委員、同業務部長等を歴任)。
 - ☞政治に対する宗教の正しい関係を社会的自主性の確立とする村上重良(宗教学者)の指摘*5。
 - ☞村上の指摘を信徒会員としての自己に振り向けて受け止める毛利。
 - ☞村上の指摘する社会実践の具体性を、今ある社会の現状を肯定、追従するような実践ではなく、何が社会か、何が組織かと、自身の来歴や現状も含めて問い返し、そこから超え出ていこうとする動きそのものに見出している毛利。
 - ☞形式や実体を先立てて組織たろうとしてきた自身の信徒会活動に、経済的發展を是として突き進んできた戦後社会のありようを重ね見させられるかたちで、人間の助かり難さに気付かされる経験。
 - ☞個々の営みと集団の実践が相互に関わり合う可能性が開かれる経験。
 - ☞予め実体的な組織の機構に位置づけて捉えるのとは別様の、「教団」への志向性の芽生え。

・信心の「集い」の可能性へ向けて

- ☞個性豊かな信奉者一人ひとりの姿が、今の我々の信仰像、そして教祖像をかたどってきた大事な要素。
- ☞それは、全体主義的に一括りにパッケージされるのではなく、個々の、それぞれのというような集団性から、「教団」への意味を問うていくヒント。
- ☞それは、教祖没後の今に留まらず、金光大神の信心それ自体へと振り向け直されていく願い。
- ☞社会の大きな変化にあって、旧来の因習からの解放を契機としてはじまった本教信心。
- ☞そこで大事なものは、目の前の世界の変化に驚き、戸惑い、不安になっている、そんな「人間」の生きる姿の傍らに、そっと佇む「教祖」の信心であったということ。
- ☞一方で、いつしか「強さ」や「正しさ」を前提にして、「つながり」や「社会」、そしてさらには、「宗教」や「信心」ということさえも捉えるようになってしまっているかもしれない現代。

*5宗教学者の村上重良が、昭和42年、金光教信徒会結成20周年を記念して開催された東日本信奉者集会における講演で語った内容。周知の通り村上重良は、「民衆宗教」という語用の嚆矢となった『近代民衆宗教史の研究』(法蔵館、同33/1958年刊行)以降、民衆思想史研究をはじめ歴史系を中心とした後続の宗教研究、そして本教を含め宗教界の各方面にも少なからず影響を与えていた。

- ☞「教祖」もまた、「教団」と同様、生成に賭けられた願いとして、いつでも始まることができるという、その「始源性」において捉え直していく可能性が、あの頃、昭和40年代の歴史に確かめられる。

まとめにかえて（おまけ）

・実は夫婦合作だった？

- ☞ 金光図書館にて一般の閲覧に供される『あいよかけよ』誌。
- ☞ 図書館御用奉仕の妻は、同誌の内容項目のデータ化作業に従事。
- ☞ 夫婦共通の話題となっていた『あいよかけよ』の記事内容。
- ☞ 柏教会の義母と、隅田武彦氏（東京理科大学教授、金光学園長、信徒会理事長等を歴任）とのご縁。

・白石かほるさん（道後教会在籍教徒）のこと。

- ☞ 『あいよかけよ』誌を通じた思わぬ出会い。

▼わたしの家には学生さんに居て貰っているんですけど、いつもわたしのことを「おばさん」って呼ぶんです。当り前のことなんですけど変な感じがするんですよ。ですからわたし、その学生さんにおばさんと呼ばずに名前を呼んで頂戴と言うんですけど、やっぱり「おばさん」て呼ぶんです。やはり、いい感じはしませんね。



▼「…」お道のお子さんなんですが、その方が、よく仰言るんです。「赤ちゃんが生まれるってことは、神秘的なことですね。」と感じられているんです。ひとつの生命が生まれるということについての深い感動ですね。わたくしも、これまで幾千とも知れぬ赤ちゃんをとりあげてまいりましたが、その都度々々が一生懸命なんです。命がけとっていいほどなんです。生まれるということは、それほどのことなんです。それだけに神様のお力におすがりせずにはおられません。／その学生さんは、さすがにお教会の子弟だけあって、そういうことがわかって下さるんですね。（「座談会老人の生きがい」『信徒会報 あいよかけよ』第71号、昭和47年）

▼私の家は祖父の代にご神縁をいただき、私も幼少のころから教会にお引きよせいただいております。弟は教師としてお道の御用にお取り立て頂き、私は昭和十三年に助産院を開業させていただきました。親先生からは常々「お産は、あなたがさせるのではない。神様のみわざで、あなたは神様のお手伝いをさせてもらっているの」とのみ教えをいただいております。（「わが力、いずこに」『あいよかけよ』第112号、昭和54年、52頁）

- ☞ 祖父（先々代教会長）の足跡も窺わせる大叔母の記事。これも、在籍教会の、そして「教団」の歴史。

・「アーカイブズ（文書の記録や保存・管理）」の重要性。

- ☞ 過去を振り返り、歴史に学ぶことを可能にする記録や文書資料の重要性。
- ☞ それぞれの信心生活における思い出深い記憶や、ふとしたメモの大切さ。
- ☞ 『あいよかけよ』誌上に浮かぶ様々な信奉者の姿も、貴重な資料。

・それぞれの生とその信心のかけがえのなさを大事にしていくために。

- ☞ 論文の執筆者も、読者も、教師も信徒も、皆が「それぞれ」に特別な日々を生きている。
- ☞ 時代状況、テキスト環境、そして、それぞれの人を取り巻く状況の上に営まれる信心。
- ☞ それは、この度紀要に掲載されたそれぞれの研究、研究者も一緒。
- ☞ かけがえのない日々の生活、さまざまな出来事の中での信心であり、研究であることの大切さ。

あの頃、あの人、あの教祖 —昭和40年代、それぞれの信心の故郷をたずねて—

白石淳平(教学研究所)

はじめに

本日はご大祭おめでとうございます。愛媛県南宇和教会の在籍の白石と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本年は前教主が御帰幽になられ、また教祖生誕210年にも当たっており、そして教学研究所設立70年という節年でもあります。さらに、来年には戦後80年を迎えようとしております。

そんな今年に刊行された紀要には、昭和40年代の信心模様を扱った拙稿の他にも、新教典刊行の様相を中心に、「教典」をめぐる浮かぶ信心への問いを論じた橋本雄二所員の論文、そして、新たな金光大神直筆帳面による研究展開の可能性を探った堀江道広所員の資料論考が掲載されることとなりました。

そうした研究動向の背景として、改めて意識されるのが、現代世界の目まぐるしい変容の中、教祖の信心をめぐる資料環境や解釈基盤も大きく変化している「今」であるということです。そうとして、一方で、昭和50年代生まれの私も含め、昭和戦後期の経験を直接には知らない世代が多くなってきた「今」でもあります。

でもだからこそ、そんな「今」は、これまでの信心、またその歴史への見方を、改めてチェックしてみるチャンスだと思うわけであります。実は私は、研究所に奉職して十数年、教祖研究に従事してきたんですが、この度の論文は、そうした経験も踏まえつつ、教団史的な射程にも及んでの問いを検討してみたものとなっています。

本日は、そんな「私」が生きる「今」を意識しながら、論文のあらましを紹介しつつ、研究の手前の問題関心やこぼれ話についても、お話しさせて頂きたいと思っております。

研究関心の根っ子のところから

まずは、ある文章の紹介から話をはじめてみたいと思っております。

歴史の流れ、社会の動き、政治経済の問題、そういうものを知ろうともしないで、全部失ってしまった、こんなはずじゃなかったと言っても、もう遅い。あとの祭りです。

私も子供が小さいときに一緒に読みましたが、『からすのパンやさん』シリーズなどで有名な、絵本作家の加古里子さんの言葉です。

加古さんは、飛行機乗りをめざして東大に行くんですが、戦争体験を経て、人間や社会のあるべき姿を伝える児童文学の道へ転身されるんですね。卒業後は、昭和電工の研究所勤務の傍ら、川崎市でのセツルメント活動など社会福祉事業にも積極的に参加しつつ、絵本作家として600点以上の作品を世に送り出し、様々な賞を受賞します。

因みに、セツルメントとは、社会教化事業を行う地域拠点のことです。最初期のものとして、ロンドンの貧民街に設立されたトインビー・ホールなんかが有名です。

日本では、ひとつ前の朝ドラ『虎に翼』にも少し出てきましたが、戦前から盛んだった帝大セツルメントの流れを汲む、東大生を中心とした全国の学生セツルメントの活動が、戦後の貧困層を支える重要な社会的役割を担ったとされます。さて、そんな加古さんが、自伝の冒頭を、「歴史」に学ぶことがいかに大事かという、痛みを伴った問題意識から語り出しているわけです。

「今」そして「未来」への世界認識にとって「歴史」ということがいかに大事なのかという視点は、ウクライナやイスラエルの情勢など、今まさに我々が目の当たりにしている状況からしても、決して他人事には出来ない、重みを持った訴えとして迫ってきます。

そしてもう一つ、研究所部長、図書館長を歴任された故金光和道先生の問いかけを紹介してみたいと思います。

皆さんは、“「教祖」を感じる本は何ですか？”と聞かれたら、何を思い浮かべるでしょうか。金光和道先生は、この質問を色んな人に投げかけてみたそうなんです。その時のことを和道先生は、いつも残念そうに仰ってました。質問に対して多くの人が、教典や教祖伝をはじめ、教内の書籍で答えたからです。和道先生が聞いたかったのは、そうではなくて、絵本や小説、それこそ漫画でもよくって、もっと身近な、日常の生活や自分の人生の何気ない場面で出合った、自分なりの「教祖」への感度だったわけです。

因みに、金光和道先生が「教祖」を感じる本は『スーホの白い馬』だそうです。

実は私も、毎年学院の講義で同じ質問を投げかけてみているんですが、そこで思われるのは、直截な「教祖」への言及のみが、その人、その時代の「教祖」への関心を表わしているわけではないということ。そしてその意味で、逆説的に、規範としての「教祖」との関わりの表現は、距離感や抵抗感、しっくり来なさというかたちで、却って信心の自己理解の提示にもなっていそうだと、ということです。

さて、この度の研究は、実はこの①と②の問題が密接に関係しているんじゃないか、という予感を確かめてみたいとの思いが、切っ掛けの一つにあったわけです。

あの頃、昭和40年代

では、何故考察の舞台が昭和40年代か、ということに関わって、私自身の自己紹介も兼ねながら、私にとってのあの頃に、思いを馳せてみたいと思います。

私は、現行教典の刊行から遡ること3年、昭和55年に生まれました。ですので、私自身の金光教イメージといたしますか、教会の雰囲気や教祖様、神様といったイメージの基礎は、幼少期である昭和50年代、そしてその雰囲気が形成されはじめた、昭和40年代以降に育まれたものであろうと思います。

当時の様子を思い起こしてみますと、幼少期には、教会の信者さんの多くはまだ働き盛りだったのでしょうか、平日の夜に月例祭が仕えられていたことも覚えています。

愛媛の地方教会ですから農業の方が多いですが、それでも当時は、年齢も職業も様々な方がおられました。例えば、お酒好きでいつも鼻の頭が赤かった林業のお爺さん。華奢で小柄の割に逞しい手で頭を撫でて貰ったのが印象的でした。他にも、颯爽とカブを乗りこなして参拝されるお婆さんや、祭典後のお直会を楽しみにカラオケセットを持参する営業マン風のおじさん、また、穏やかな笑顔の合間に鋭い眼差しを見せる生花のお師匠さんなど、多様な、そしていわゆる「名物」の信者さんの姿が浮かんでくるのは、私だけでなくあの頃を知る多くの人に、共通の感覚ではないでしょうか。

一方で周囲の様子はというと、宗教自体にやや難色を示すような、そんな世間の雰囲気もあり、怪訝がる友達を適当にやり過ごした苦い経験なども、同時に思い出されます。

そうした時代における、一つ一つは小さいけれど、色々な信心の営みがあって、偶々それが一緒にあるというような、そういう「集い」の感じは、今、そしてここからの本教信心を展望するにあたっての、大事なヒントになるのではないかと、そんなふうに思うわけです。

ところが、そうした実感に対して、従来の研究的把握においては、主に今日に直接繋がる教務・教政上の歴史過程として顧みられてきたのが、昭和40年代でした。

急速な経済発展の一方で様々な社会問題が生じていた同時期は、対社会的な問題への手立てを講じるべく教団が構想され、いわゆる「二課題」の設定や、先に触れた教典の刊行など、後に諸々の教務施策の実現にも繋がっていく戦後教団史の画期として見られてきたからです。

そしてその背景には、本格化した靖国法案をめぐる議論など、昭和40年代当時の政治・経済状況や国際情勢への懸念が、三代金光様、そして高橋正雄の帰幽といった、いわゆる「教団代替わり」の危機意識と絡まりつつ横たわっていたことが指摘されています。

そこで、そうした従来の把握の一方で、信奉者個々の様子はどうなっていたのか、という関心が起こってきたわけです。このことに関わって興味深いのが、昭和40年代以降は、個々の実存的な問題と重ね合わせた「教祖」探究の代表的な検討対象となってきた高橋正雄の“没後”にあたっているということです。

そうして、対社会的な教務・教政上の施策や、そこでの統一的・単一的な信仰表明とはまた違った様相として、高橋亡き後における信奉者それぞれの個的な経験として浮かぶ「教祖」への求めとどのように関わりながら本教の自己理解が醸成され、「教団」が構想されることとなっていたのか、との問いが浮かんでくることとなったわけです。

それぞれに時代社会の影響を受けつつ生きた信徒らにおける、生活と信心との切り結びのありようには、制度的実体に留まらない、より幅広い視野に立った「教団」、そして「教祖」への問いの可能性が予測されるからです。

『あいよかけよ』と河上讓一

さて、ここから論文の内容を見ていきたいのですが、時間も限られておりますので、詳しくは紀要を手にとって頂くこととして、ここではかいつまんで紹介していきます。

まずは、今回重要な手がかりとなった『あいよかけよ』誌についてですが、同誌は、昭和43年に終刊となった「信徒会報」の号数を引き継いで、新装、改訂されたものです。

この『あいよかけよ』は、教報やその他の教内紙誌類には表われてこない信奉者個々の営みを、その都度の教務・教政の動向や時代社会の状況とともに顧みることができる、貴重な歴史資料であると言えます。

ところで、『あいよかけよ』に深く関わった人物として、河上讓一さんという方がおられます。改訂当時の編集局長で、信徒会結成の発起人の一人でもあり、信徒会連合本部委員長を務めた方です。その経歴を追ってみますと、広島県の新市にて出生した河上は、織物の卸商を営んで成功していたのですが、大手取引先の破産によって連鎖倒産を余儀なくされ、しばらく自暴自棄となります。そして、再起へ向け様々な神仏信仰への関心を寄せていたなか、妻の手引きによって新市教会に参拝した際に出合った教えに感激し、以来、信徒総代となるまで信心に打ち込む、というわけです。

そうしておかげを頂かれ、織物組合の検査長や女学校の塾長等を歴任し、さらに、学校運営に携わる中で、後のブラザー工業の前身である日本ミシンと関わり、昭和12年には名古屋本社に招かれて日本ミシンに正式に入社、17年には取締役にも昇進します。当時は熱田教会に在籍し、終戦直後の教会復興にも貢献、その後、信徒議員に選任され教団の要職にも就くこととなり、信徒会の結成と発展に尽力されました。

さて、社会事業に献身するそうした河上の姿は、『あいよかけよ』誌上において「二課題」をそのまま生きた人として紹介され、以降、そのような信徒らの信心実践や経歴が、数多く掲載されていきます。

しかし、そうした評価の一方で河上自身は、どこまでも個人的な経験に即した信心理解でしかない、という認識を吐露してもあります。ここには、「二課題」の視点を反映しつつ実践例として切り取る編集意図と、自らの信心の歩みを振り返る当人の実感とのズレが浮かんでいるでしょう。

それはすなわち、当人にとっては思わず行動してきた結果見出された信心の世界が、事後的に「二課題」に位置づける話型によって、予め教祖のなぞらえとして価値付けられてしまう問題です。

そのようにして、個人的な経験としての信心営為から、普遍的に通用する信心像・教祖像が抽出、構築されていく一様相とも見られるわけですが、それは、規範として生きることが目指される教祖と、生きることで掴み取られていく、実践の「始源」としての「教祖」との、意味的な差異の問題に通じています。

そうとして、前者の模範としての教祖が、人間の生を縛る向きであるのに対し、後者

は逆に、その生の意味を押し広げていく可能性と同時に秘められているとすれば、そうした紙面の切り取りの様相は、直截的に教祖の教えを掲げて布教の重要性を訴えかけるような、教務施策上の価値評価を先立てては見えてこない、信心の裾野の豊かな広がりを拓く可能性を、逆説的に照らし出している、とも言えるわけです。

そしてその可能性は、各時代に生きられた、それぞれの信心の姿に通底するものなのではないでしょうか。

それぞれの「戦後」と「教祖」

さて、そうした視点から改めて取り上げてみたいのが、東京出張所長や教監といった教団の要職を歴任した、安田好三です。

千葉県にて出生した安田は、親類の養子となり東京の小学校に通うんですが、大連に渡った後、諜報部隊育成候補として陸軍中野学校に招集され、同校の教官を務めるまでになります。

小笠原諸島に出征中に終戦を迎えるのですが、昭和19年に神奈川演習で小田原教会にご縁を得たことを切っ掛けに、同教会子女と結婚し、教会を後継することとなります。

その安田が昭和40年代に語った教祖観、それが、「私の金光大神は、私をコントロール(制御)するほうでなく、私の信心活動、すなわち話したり、行動したりするアクセル(始動力)の働きをする」というものであったわけです。

社会問題に対する教団としての積極的な行動指針への求めを反映した、教祖の信心をめぐる「実意丁寧」で「おとなしい」社会的評価の乗り越えの期待と言えます。当時の代表的な教務主導者としてのイメージを彷彿とさせる、いかにもアグレッシブな信心像として見ることもできます。

そうとして興味深いのは、そこには同時に、信仰的規範、いわば「回帰」の宛先として認識論的に求められる教祖というよりも、安田という一人の人間において、常に実践の「始源」、行動を促す故郷として生きられるような「教祖」の可能性が感じられるということです。

同時期に安田は、靖国法案などについて議論された「政治社会問題研究会」において、こんな発言もしています。

「われわれはすぐ教団、教団と使いますが、教団とはいったい何を意味するものなのか。」

政治的問題に相対する実体組織たる教団としての社会性の問題が、個々の信仰的实践との関係で問題化されていた文脈上での発言でした。重要なのは、安田の言が、「教団構想」といった制度的な意味とは違った問題の景色を予測させる問いかけになっているということです。

もっと言えば、可能性としての「教団」へ向けて安田が問いを差し向けているのは、むしろ教団を統一的な信仰や態度の表明を発し得る制度的実体とする認識それ自体であ

り、またそこでの信仰的価値の前提化であったろう、ということです。

それは、東京出張所所長として、教団を代表して公的な場面に臨んできた安田自身の経験に発する問いであり、実社会における個々の営みの統体として志向される「教団」、そしてその「始源」として分有される「教祖」の可能性へ向けて、本教信心が鍛えられていくことへの願いでもあったのではないのでしょうか。

そして、そこで見逃してはならないのは、そうした安田における願いの強さは、自身における戦後の「痛み」に支えられている、ということです。教監在職中、折に触れて語られたとされる生き残りの負い目や罪の意識は、安田における強い問題意識や「教祖」への求めが、自身の戦争体験に発していたことを物語っているのであります。

さて、そうした視点からもう一人、紹介したいのが、「教祖」探究の異才、竹内長次先生です。奇しくも、「覚書」が知られることとなった明治43年生まれの竹内先生は、母親の影響で本教信心に触れることとなります。医師を志して東京大医学部に学ぶも肺を患い、縁あって、聴講生として昭和9年に教義講究所に入所後、一時、教師として本郷教会で御用されます。しかし、戦時下に軍医候補して引き戻されることで、再び医療に携わることになるんですね。その後、平成元年の帰幽まで、本教教師であり医療にも携わり続けた立場から、時代社会の変化に立ち会いつつ、教祖の信心について数多くの言説を残した人です。

その竹内先生が、「迷信打破」教義を中核とした教祖像にさしたる目新しさを感じなかった「少年時代」を語っているわけです。急速な近代化の只中で十代を過ごした大正期の竹内少年にとっては、「迷信打破」というキャッチフレーズさえ、いわゆる「世俗化」が進行する時代の、あたりまえの光景だったわけです。しかし、さらに注目すべきは、昭和28年刊行の教祖伝記『金光大神』を読んだことが、日柄方位や毒立をめぐる金光大神の信心について、認識を新たにさせたということです。大正期の竹内少年にとって「耳新しく感じなかった」信仰言説が、戦後に至り、御伝記に触れることによって、「大切な御教」として改めて受容され直したわけです。

しかし、そこにも、テキスト環境の変遷を経験しつつ、絶えず竹内に教祖の信心を求め続けさせてきた、戦後社会の迫りに発する信心の問いの実際性が滲んでもいることを見逃してはならないでしょう。

竹内先生のもとには、その晩年まで信心や歌作をめぐって教示を請うべく教内外から手紙が寄せられたのですが、その数の多さと裏腹に、竹内先生が残した言説の数々は“答え”ではなく、日々人間の生死に向き合う中で求められた、決して絶えることのない救済への“問い”であったと考えられるのであります。それは、「世俗化」といった歴史評価とは、また別のありようとして浮かんでいると言えます。

ここからは、何が教祖を「教祖」として求めさせ、展開させるのかという問題を考えさせられます。思えば、竹内先生が学生時代に交流していたアララギ派は、写實的、生活

密着的歌風を特徴とし、人間の深層心理に深く切り込むような問題意識の作風でした。だから、竹内先生の言説に読まれるべきは、教祖の問題ではなく、「教祖」として求めさせ、語らせる「人間」の問題とは何か、の方ではないでしょうか。

その問いの構え方にこそ、「教団」をどう思い描くのか、どうかたどるのかの根っ子が、深く広く張られているのであり、それは、昭和40年代という時代に生きられた、それぞれの「戦後」の不安と痛み、そしてその重みと共に掘り起こされるべく、今へと投げかけられているように思われるのであります。

あらためて、「教祖」って!? 「教団」って!?

さて、こうして見てくると、『あいよかけよ』誌や信徒会の歩みからは、個々の助かりへの願いと、集団的な意義との関係の問題を思わされます。

信徒会組織化に尽力した毛利賢蔵さんという方がおられます。彼は、信徒会結成20周年を記念して開催された、宗教学者の村上重良の講演会で、興味深い反応をしました。

社会的自主性の確立を、政治に対する宗教の正しい関係だとする村上の指摘を、毛利は、信徒会員としての自己に振り向けて受け止めるんですね。そして、組織活動の充実のみが発展ではなく、めいめいの助かる働きが、生き生きと表わされていく中身でなければ、金光教の信徒会の動きではなくなる、と訴えるわけです。

毛利は、社会の現状を肯定、追従するような実践ではなく、何が社会か、何が組織かと、自身の歩みをも含めて問い返し、そこから超え出ていこうとする動きそのものに、村上の指摘する社会実践の具体を見出そうとしていたと考えられます。それは同時に、形式や実体を先立てて組織たろうとしてきた自身の信徒会活動に、経済的發展を是として突き進んできた戦後社会のありようを重ね見させられるかたちで、人間の助かり難さに気付かされる経験でもあったでしょう。しかしだからこそ、個々の営みと集団の実践が相互に関わり合う可能性が開かれる経験となっていたのではないのでしょうか。

その意味で、昭和40年代の信徒会には、予め実体的な組織の機構に位置づけて捉えるのとは違う、「教団」への志向性の芽生えとして、高橋正雄の願いを引き継ぎつつ、さらにそこから超え出て行こうとする兆しを、確認することができるのであります。

このように、昭和40年代以降の様相をうかがってきて改めて思われるのは、個性豊かな信奉者一人ひとりの姿が、今の我々の信仰像、そして教祖像をかたどってきた大事な要素となっている、ということです。そしてそれは、全体主義的に一括りにパッケージされるのではなく、個々の、それぞれのというような集団性から、「教団」への意味を問うていくヒントになるのではないのでしょうか。

そして、このことはさらに、金光大神の信心それ自体へも振り向け直されていく願いでもあります。何故なら、社会の大きな変化の只中であって、旧来の因習からの解放を契機としてはじまったのが、本教信心であるからです。しかし、そこでより大事なものは、

目の前の世界の変化に驚き、戸惑い、不安になっている、そんな「人間」の生きる姿の傍らで、そっと佇み手を合わせるのが「教祖」の信心であったという事実です。

一方で、いつしか「強さ」や「正しさ」を前提にして、「つながり」や「社会」、そしてさらには、「宗教」や「信心」ということさえも捉えるようになってしまっているかもしれない現代であることを思わせるのであります。

だからこそ、「教祖」への求めもまた、「教団」と同様、いつでも始まることができるという願いとして、その「始源性」において捉え直していく可能性が、あの頃、昭和40年代の歴史に確かめられるのではないかと。そんなふうに思うわけです。

おわりに（おまけ）

時間がありませんが、最後におまけを少し。本来研究所の研究は皆、所全体の共同研究だと言われるように、色々な方々のお世話になってかたちになっているのですが、実は、この研究は、夫婦合作でもありました。

今回重要な資料として意味をもった『あいよかけよ』は、金光図書館にて一般の閲覧に供されるとともに、内容項目のデータ化も進んでいます。そのデータ化作業に従事しているのが、図書館の御用奉仕である私の奥さんなんですね。なので、『あいよかけよ』の記事内容は夫婦共通の話題で、お互いに面白い記事を見つけて報告し合う毎日でした。

その延長で、奥さんの里である千葉県柏教会の義母が、学院卒業後しばらく霊地にあって隅田武彦さんのお宅で御用されていたという事実も知りました。こんなご縁もあるのだなど、二人して感慨深い思いをした次第です。

さらに、ある日、奥さんがいつものように、「自分のことを「おばさん」って呼ばれて怒ってる面白い記事があったよ～」と教えてくれたんですが、その「おばさん」、わたしの大叔母、つまり祖父の姉だったんですね。

先々代教会長の祖父は、いわゆる婿養子のような形で教会後継に入っているのですが、祖父の実家のことはよく知らず、また聞かされてもいませんでした。記事からは、大叔母が助産院を営んでいたことなど、僅かな情報しか浮かんでこないのですが、祖父の足跡もうかがわせる記事との出会いは、なんだか嬉しくなる経験でした。

なので私は、コピーを送ろうかなんて慌てて教会に連絡もしたのですが、その時は、直接教会に言及したわけではないので要らない、との反応でした。これは、少し残念でしたね。何故かというところ、通常、教会の歴史というと、教会長や教師とその家族の歴史のようにして見られがちなのですが、果たしてそうなのか。そこにはもっと拡がりを持った、関わりの歴史があるのではないかという疑問を、常々持っていたからです。

この度の研究の取り組みも相俟って、改めて、この白石かほるさんの記事も、在籍教会の、そして「教団」の歴史だと、私は思っております。

さて、このような研究の取り組みを通して、ひしひしと感じさせられるのが、昨今世

界的にも叫ばれている、「アーカイブズ」の重要性です。過去を振り返り、歴史に学ぶことを可能にする記録や文書資料が、いかに大事かということです。『あいよかけよ』誌上に浮かぶ様々な信奉者の姿も貴重な資料であるように、何が資料になるか分からない。だから、それぞれの信心生活における思い出深い記憶や、ふとしたメモも、実は大切な歴史資料になる可能性を秘めているんですね。

以上、まとまりのない話を聞いて頂きましたが、こうして今年も紀要が世に送り出されて思うのは、論文の執筆者も、読者も、教師も信徒も、皆が「それぞれ」の大事な日々を生きる一人一人だという、当たり前だけど、重要な事実です。

今回確認したように、時代状況、テキスト環境、そして、それぞれの人を取り巻く様々な状況の上に、ここまで営まれてきたご信心があります。その意味でそれは、この度紀要に掲載されたそれぞれの研究、研究者も一緒だということです。

今回成果が掲載された研究者一人一人、そしてもちろんこれまでの成果全てもそうなんですが、かけがえのない日々の生活、さまざまな出来事の中での信心であり、研究であることの大切さを、噛み締めさせて頂いております。

どうぞ、是非紀要を手にとって頂いて、忌憚のないご意見をお寄せ頂ければ幸いです。本日は有難うございました。